

人が集う空間としての名所：
東京 23 区内における複合商業施設の名所化
を事例に

三谷 紘子

古来より日本人には馴染み深い「名所」であるが、近年の複合商業施設建造ラッシュによって「新名所」という言葉を耳にするようになった。名所とは「風景の良さや史跡で名高い所、あるいは、特有の風物・特産物などで有名である場所として、その価値を認めた者が訪れる空間を示す言葉」である。では新名所とは何か。本論ではまずこの意味の二面性について考える。もともと名所がどのような位置付けであったかを定義づけ、日本人の名所に対する認識について述べた。そして昨今イメージされる名所とは何であるかを調べるべく独自に意識調査のアンケートを実施したところ、当初思い描いていた自分なりの名所観とは異なるデータベースが出来あがった。その分析結果から、世間において複合商業施設と名所との関係性はあまり実感されていないことが明らかになった。また、現在ある複合商業施設を項目ごとに分類した一覧を用いてキーワードを抽出し、その対象にあたる複合商業施設でフィールドワークを行った。そこから、複合商業施設には「自然景観」と「ゆとり空間」という共通点があることを導き出し、人工物の中に取り込まれている矛盾について触れ、しかし包摂されている点を説明した。それをもとに現代の視点から名所が持つ構成要素や、複合商業施設においてどのような要素があることで名所と呼ばれ、人が集うのかを探った。結論として、その要素は時代が変わり名所と呼ばれる対象が最先端の施設になったとしても、変わらないものであることを指摘した。

若者ファッションと空間：
渋谷のギャル・マンバを事例に

山口 瞳

渋谷のガングロ・ヤマンバが話題となっ
てから10年が経とうとしている。1999年
頃の全盛期からは衰退しているものの、現
在でもギャル・マンバとして渋谷に出現し
続けている。先行研究からは登場期・全盛
期頃のガングロ・ヤマンバのことや、若者
ファッションと場所の結びつきを論じてい
るものは見受けられたが、現在のギャル・
マンバを論じたもの、ギャル自身の言葉
に読み取れる身体感覚を分析したものはい
ない。

そこで本論文では、ギャルの聖地渋谷と
して認知されるまでの渋谷の歴史と、ギャ
ルが多く集まる渋谷センター街の若者の
歴史を見るとともに、ギャルとはどのよ
うな人であるか、なぜ存続しているのか、
そしてなぜ渋谷に向かうのかを空間論的
な視点で分析する。

本調査は観察とアンケート調査から成
る。観察から彼女たちのたむろする場所
と行動を記述し、たむろする場所、行動
内容、アイテム、撮影者の4視点で主に
チーマーと比較し、存続期間を延ばす理
由を探った。それにより、彼女たちのた
むろする場所が限られていること、暴力
ではなくイベントの集客数で勢力を争う
こと、携帯電話により仲間を増やしてい
くこと、日本のマスコミのみならず海外
の注目も集めていることがわかった。ま
たアンケート結果をもとに、ギャルの社
会的帰属との関係、ギャルとはどのよ
うな女性であるか、彼女たちの向かう
場所の3視点からギャルを捉えなおし
ていった。それにより、彼女たちがファ
ッションを選択するために所属を選ぶ
か、あるいはファッションの選択を諦
めるかを迫られること、社会的に威圧
的にとられる彼女たちは常に葛藤を迫
られていること、「見る/見られる」とい
う日常からの離脱のため

に「クラブ的」空間に足を運ぶことがわかった。

渋谷がギャルの聖地として、ギャルの高密度空間であり続ける限り、ギャルは誕生し続けるであろう。また、彼女たちは、「クラブ的」空間で見た人や雰囲気、得られた感覚を常に持っていたがためにギャルファッションで身を包み、その力を最大限に与える本場の服を求めて、同時に、日常からの離脱を求めて渋谷に向かうのである。

村上春樹の小説にみる「ホテル」の意味の多義性

山口 寛子

ホテルとはどういう空間だろうか。筆者は最近の雑誌や映画・文学作品にホテルが都市空間の中で「泊まる空間」以上の意味があるのではないかと感じた。

本論では村上春樹の小説の中のホテルを読み解いていくことによって都市空間でのホテルの多義性を解明する

具体的には『羊をめぐる冒険』の「いるかホテル」、『ダンス・ダンス・ダンス』の「ドルフィン・ホテル」と「いるかホテル」、『ねじまき鳥クロニクル』の「208号室」を考察する。

村上春樹は川本（2006/1980）によると「都市の感覚」を持った作家である。作風では現実世界と主人公の内的空間を行き来する物語が多い。多くの論評がかかっている。

まず『羊をめぐる冒険』であるが、ここでは古くさいホテル「いるかホテル」が、主人公が現実世界と異界を行き来する際の通過点になっていることをあげる。次に『羊をめぐる冒険』の続編である『ダンス・ダンス・ダンス』では現実世界では「いるかホテル」が建っていた場所に高級ホテル「ドルフィン・ホテル」がここでは「ドルフィン・ホテル」がそして、ホテルは、誰もが通りすぎる場

所であることから、「いるかホテル」を「僕」が孤独で空虚であることをあらわしている。

『ねじまき鳥クロニクル』の「208号室」においては、「208号室」のあるホテルがだんだんと変容していく様子を見ることによって、ホテルがだんだんと「おぞましい空間」になっていく様子を指摘する。

このように、ホテルにいろいろな意味が付与されるのは、ホテルが「限定的に」居住する空間だからである。家とは違う「ホテル」は完全にすむ空間にはなり得ないことから、意味が浮遊し、多くの意味を含ませることのできる空間となるのである。

観光スポットの個人的な聖地化： 東京タワーを例に

山崎 百合

人間は場所に意味を付与しながら生きていられると言われている。このような「場所への意味づけ」はどのように行われていくのだろうか。本稿では、小説『東京タワー オカンとボクと、時々、オトン』（リリー・フランキー著）を題材に見ていく。一般的には観光スポットとして消費される東京タワーが、個人的にはかけがえのない「聖地」という意味を持つようになるのではないかと、という仮説を立てて検証した。

先行研究では、第2章で、意味づけにおいて「個人的な経験」が最も重要な要素であることを指摘した。また、「聖地」が持つ意味についても調べ、宗教的意味がない場所も聖地となりうるのではないかと可能性を示した。第3章では、塔が「聖」の象徴性や「高所衝動」という精神作用を持つことについて紹介した。第4章では、小説の舞台となる東京タワーについて論じ、一般的に観光スポットとしての意味を持つことを確認した。

第5章では実際に小説の読み取りを行った。幼少の頃のボク（リリー・フランキー）